# 『讃岐典侍日記』執筆意図とその背景について

武藤菜海

## 一　はじめに

『讃岐典侍日記』は平安末期、堀河天皇に仕えた女房・藤原長子（讃岐典侍）によって書かれた作品である。

思ひ出づれば、わが君につかうまつること、春の花、秋の紅葉を見ても、月の曇らぬ空をながめ、雪の朝御供にさぶらひて、もろともに八年の春秋つかうまつりしほど、常はめでたき御こと多く、朝の御おこなひ、夕べの御笛の音忘れがたさに、なぐさむやと、思ひ出づることども書きつづくれば、筆のたちども見えず霧りふたがりて、硯の水に涙落ち添ひて、水くきの跡も流れあふ心地して、涙ぞいとどまさるやうに、書きなどせんにまぎれなどやするとて書きたることなれど、姨捨山になぐさめかねられて、堪へがたくぞ[1]。

序文でこのように述べられる通り、この作品は作者の主君であり愛人でもあった堀河天皇の死をきっかけとして執筆された。上巻は堀河天皇の発病から死に至るまでの約一ヶ月間が、下巻では堀河死後に白河院の要請を受け鳥羽天皇の下へ再出仕してからの作者の一年余の日々が描かれる。

先行研究において『讃岐典侍日記』は、池田亀鑑氏の「讃岐典侍日記の著者は、第一に死を見出した人であるといえる[2]」との言からも明らかであるように、天皇の死を記録した女房日記として、主に上巻の史料的価値が評価されてきた。しかし一方で、文学作品としての読みは少なく十分にその価値が検討されてこなかった部分があるように思われる。

そこで本稿では、作者の執筆意図とその背景に注目し、日記文学としての『讃岐典侍日記』を捉え直すことを試みた。

## 二　作者について

まず、『讃岐典侍日記』作者・藤原長子についてみておきたい。長子の父である顕綱は『蜻蛉日記』に登場する藤原道綱の孫にあたり、歌人として知られる弁乳母を母にもつ。顕綱自身も勅撰集に二十五首採られ家集『顕綱集』も残すなど、歌人として知られている人物である。ほか『万葉集』『源氏物語』などの書写伝承にも関わっていたとされる[3]。

弁乳母は後三条天皇生母である禎子内親王（陽明門院）の乳母であったので、顕綱は陽明門院の乳母子ということになる。顕綱の子とされる有佐は『尊卑文脈』『今鏡』で後三条天皇の落胤と記述されるなど後三条天皇との強い結びつきもみうけられ、白河・堀河治世下でも顕綱一門が一定の存在感・影響力を有していたことは指摘されているところである(4)。

長子の姉・兼子は堀河天皇の乳母であり、堀河天皇即位の折には褰帳役を務めた。直接的には、この姉との繋がりから長子は堀河天皇のもとへ出仕することになったのであろう。

日記名からも明らかなように彼女の役職は典侍、内侍司の次官にあたる。天皇の傍に侍して宮廷の行事・神事などを掌った高位の女官であった。

しかし、堀河天皇との間柄は単なる主従関係にとどまらず男女の関係にもあったとみるのが通説(5)である。

堀河天皇に対し主君以上の愛情を抱いているからこそ、長子は作中で彼女にしか語り得ない堀河天皇との特別な思い出を何度も回顧し、また下巻冒頭部では愛した人の遺児である鳥羽天皇のもとへ再出仕することを躊躇うのである。

こうした作者の立場・作者と天皇との関係性を理解したうえで、次に本文中の描写を見ていきたい。

## 三　「御膝の陰」

『讃岐典侍日記』中でも特に印象的な場面のひとつとして、「御膝の陰」にまつわる描写が挙げられる。

これは病床の天皇が膝を高くして関白・藤原忠実の目から看護する作者の姿を隠したというエピソードである。その内容は勿論、作中全体で形を変えながら三度にわたって記される点も特徴的といえる。

以下、順に本文の「御膝の陰」描写をみていきたい。

①大殿近く参らせたまへば、御膝高くなして陰に隠させたまへば、われも単衣を引き被きて臥して聞けば、「御占には、とぞ申したる、かくぞ申したる。御祈りは、それそれなん始まりぬる。また、十九日より、よき日なれば、御仏御修法のべさせたまふ」と申させたまへば、「それまでの御命やはあらんずる」とおほせらる。

①は、堀河天皇発病から崩御の経緯を時間軸に沿って振り返る上巻の中での一場面である。

簡潔な書きぶりが、かえって読み手にその場の緊迫した空気、各人の心情を伝える結果となっているように思われる。ごく自然に膝を立てて作者を忠実の視線から隠す天皇と、その動作の意図を察し「われも」と単衣を引き被り臥して天皇の膝に隠れる作者の姿からは、二人の間にある近しさが読み取れよう。

次に「御膝の陰」が語られるのは下巻、堀河天皇死後の天仁元年（一一〇八）正月の記事においてである。

作者が鳥羽天皇へ初めて出仕した翌日、天皇の御前に参上した忠実は見知った作者の姿に気づいて次のように話しかけてくる。

②「思ひかけざりしことかな。かやうに近やかに参りて、もの

など申ししこととは、思はざりしかな。例ならでおはしまいりしをりなど、御かたはらに添ひ臥させたまへりしをりに参りたりしかば、御膝高くなさせたまひて、陰に隠させたまひしをり、かやうならんことどもとこそ思はざりしか。げに陰にも隠れさせたまひしかな。世はかくもありけるかな」といひかけて立たせたまひぬる聞くぞ、げにと心憂き。

このように②は作者でなく、目撃者であった忠実の視点を用いて「御膝の陰」が記される。昔日の出来事に堀河天皇崩御の事実をも重ね合わせ「げに陰にも隠れさせたまひしかな」と世の移り変わりを嘆く忠実の言葉も、まるで作者自身の心情を代弁するかのようで印象深い。

忠実という第三者の口を借りて語られることで、このエピソードは①とは違った、より特別な重みのある思い出へと変化しているといえる。

三度目の「御膝の陰」は、諒闇が明け鳥羽天皇が初めて内裏へ還幸した夜という時間軸で、作者の回想の形で記される。

③一昨年のころに、かやうにて夜昼御かたはらにさぶらひしに、御心地やませたまひたりしかども、院より、「あなかしこ、よくつつしみて、夜の御殿を出でさせたまはで、しばし」と申させたまひしかば、つれづれのままに、よしなし物語、昔今のこと、語り聞かせたまひしをり、殿のあとのかたに寄りたてまつらせたまひしかば、そのままにてさぶらはんは、なめげに見苦しくおぼえしかば、起き上がりて退かんとせしを、見えまゐらせじと思ふなめりとおぼして、「ただあれ。几帳作り出でん」とて、御膝を高くなして、陰に隠させたまへりし御心のありがたさ、今の心地す。

忠実参上に慌てて退出しようとする作者、その思いを汲み取ってか「そのままでいなさい。私が几帳を作ってあげよう」と言って膝を立てる天皇――。

③ではまずこのように、①②と比べて「御膝の陰」がなされるまでの作者と天皇の心の動き・動作がより細かく説明的に述べられている。

また、①でみられたような緊迫感がなく、より美しく晴れがましい思い出という側面が強調された描写となっている。

①と③が同じひとつの出来事を語っているものならば「一昨年」でなく「去年」と記すべき所であるから、あるいは「御膝の陰」は一度でなく何度か起こった出来事だった可能性もある。一方で小谷野純一氏のように「日常的に屢々現出した行為であったとすれば、このように固執し、三度に亘り記述することはなかったのではないか」として「御膝の陰」が実際には一度限りの体験であったのではないかとの見方も強い[6]。

実際のところはどうあれ、この「御膝の陰」に隠される、という要素が両者に共通し、その描かれかたが徐々に変化していることは事実である。この点に作者の作為を考えてみる必要があろう。

作者は自分の頭に強く残っていた「御膝の陰」というイメージを回想を重ねるごとに変化させ、日記中の繋がりからよりその場に相応しい形に変えて記していったのではないか。

## 四　「雪の朝」

前節でみてきた「御膝の陰」場面からも窺えるように、『讃岐典侍日記』内の時間構造は複雑である[7]。

特に下巻は、一見すると鳥羽天皇在世下において日次の形式に沿って綴られていくのではあるが、作者の主眼は明らかに鳥羽天皇後宮での日々よりも、それを契機として思い起こされる堀河帝と過ごした日々のほうにある。

こうした下巻でみられる回想描写の構造について考える例として、次に五節の話題から端を発する「雪の朝」場面の構造と展開の流れをみていきたい。

かやうに、世のいとなみやうやう過ぎて、今は、五節、臨時祭、いとなみあひたり。今年の五節は、大嘗会の年なれば、「例にも似ず、上達部数添ひて、いとめでたかるべき年」といひあひたり。女房たち、われもわれもと、「御覧の日の童とて、ゆかしきこと。寅の日の夜、すでに例のことなれば、殿上人、肩脱ぎあるべければ、いづれよりかのぼるべき」と問ひあはれたれば、いらへせんともおぼえず。

まず下巻の基本時間軸である鳥羽天皇在世下、天仁元年（一一〇八）十一月の五節について述べられる。

五節という明るい話題に沸く他の女房達に対して作者の心が沸き立つことはない。彼女の思考は堀河天皇と過ごした過去と遡っていく。

一年、かぎりのたびなりければにや、常より心に入れてもて興じて、参りの夜よりさわぎ歩かせたまひて、その夜、帳台の試などに夜ふけにしかば、つとめて、御朝寝の例よりもありしに、「雪降りたり」と聞かせたまうて、大殿ごもり起きて、皇后宮もそのをりにおはしましかば、御かたがたに御文奉らせたまふとて、御前にさぶらひしかば、日かげをもろともにつくりて、結びゐさせたまひたりしことなど、上の御局にて、昔思ひ出でられて、ものゆかしうもなき心地してまでなど。

このように堀河天皇と過ごした過去の五節の準備を回想した後で、一旦作者の視点は目の前で起こる現実に戻される。

童のぼらんずる長橋、例のことなれば、うちつくり参りてつくるを、承香殿の階より清涼殿の丑寅のすみなるなかはし戸のつままでわたすさま、昔ながらなり、御前、めづらしうおぼして御覧ずれば、暮るるまで御かたはらにさぶらふにも、雪の降りたるつとめて、まだ大殿ごもりたりしに、雪高く降りたるよし申すを聞こしめして、その夜御かたはらにさぶらひしかば、もろともに具しまゐらせて、見しつとめてぞかし、いつも雪をめでたしと思ふなかに、ことにめでたりしかば…

ところが、過去から現実に戻ったかに見えた作者の目は、「昔ながらなり」といった感慨の後また再び過去へと向けられてしまうのである。以降、彼女の主眼は堀河天皇と過ごした過去の雪の朝の様子を書き記すことに置かれていく。

…をりからなればにや、御前の立ちしは、せめてのわが心の見なしにや、かかやかしきまでに見るに、わが寝くたれの姿、まばゆくおぼえしかば、「常よりみめほしきつとめてかな」と申したりし、をかしげにおぼしめして、「いつもさぞ見ゆる」とおほせられて、ほほゑませたまひたりし御口つき、向かひまゐらせたる心地するに…

堀河天皇との美しい思い出は、ここで最高潮に達するといってよい。だが、そこで作者は鳥羽天皇の言動によって現実へと引き戻される。

…思ひ出でられて、つくづくと思ひむすぼるるも、ただも御覧じ知らず、「あのうちへくもやり持ちたるもの、こはせて。いで、いで。出で行かぬさきにこはせよ。それ、いへ、それ、いへ」と引き向けさせたまへば、うつくしさによろづさめぬる心地す。

目の前にいる幼い鳥羽天皇のあどけない姿に、作者は堀河天皇のいない現実を実感する、といった構成である。

以上「雪の朝」前後の記事をみてもわかるように、下巻には再出仕の日々の叙述の中に、堀河天皇在りし日の回想がことあるごとに入り込んでくる。

堀河帝の発病から崩御までという一つの出来事について記される上巻よりも、実は下巻のほうが一つの時間軸に制約されていないのである。

こうした再出仕の日々からの連想は堀河天皇在世時への回想のみにとどまらず、故事や他者の和歌引用に及ぶ。

例えば下巻冒頭部では、再出仕への拒否感・葛藤を吐露した後に、自分と似た状況下でやはり再出仕へ躊躇う周防内侍の和歌を引用する。

周防の内侍、後冷泉院におくれまゐらせて、後三条院より、七月七日参るべきよし、おほせられたりけるに、

天の川おなじ流れと聞きながらわたらんことはなほぞかなしきとよみけんこそ、げにとおぼゆれ。

このような折り重なる回想描写の構造、また前後の繋がりを考えての素材選択からもまた、作者の意図的な作品演出という意識の現れとみてとることができる。

## 五　鳥羽天皇と作者

序文には、作者は堀河天皇に八年間仕えたとある。しかし作者が日記に記したのは、八年間の中でも最後の一ヶ月、そして堀河天皇死後の生活であった。

何故作者は下巻において、堀河天皇に仕えた日々を直接に書き記さず「再出仕後の現在を契機として連想される範囲で帝を語ろうとしている」[8]のか。

この点について考えるため、次に鳥羽天皇と作者との関係についてみていきたい。

日記中で初めて作者と鳥羽天皇との接触が叙述されるのは、下巻の鳥羽天皇即位式の記事である。

即位式において長子は褰帳役を果たした。下巻の記述によれば元々褰帳役は鳥羽天皇の乳母の一人である「大納言の乳母」（藤原実子）に決まっていたが、実子の父である公実が死去したことで長子へその役目がまわってきたという。

ほのぼのと明け離るるほどに、瓦屋どもの棟、霞みわたりてあるを見るに、昔内へ参りしに過ぎざまに見えしほどなど、思ひ出でられて、つくづくとながむるに、北の門より、長櫃に、ちはや着たるものども、蘇芳のこき、打たるくはうこくの出し衣入れて、持てつづきたる、べちにおもしろく見ゆべきことならねど、所がらにや、めでたし。人ども、見さわぎ、いみじく心ことに思ひあひたるけしきどもにて、見さわげども、ただわれは、何ごとにも目も立たずのみおぼえて、南のかたを見れば、例の、八咫烏、見も知らぬものども、大頭など立てわたしたる見るも、夢の心地ぞする。かやうのことは、世継など見るにも、そのこと書かれたるところは、いかにぞやおぼえてひきこそかへされしか、うつつにけざけざと見る心地、ただおしはかるべし。

鳥羽帝即位式にあたっての内裏は、長子にとって『大鏡』に書かれた時を隔てた世界や、遠い唐土を描いた障子絵の世界に似た「夢の心地ぞする」空間であった。そして、違和感をぬぐえないまま彼女は儀式に臨む。

手をかけさするまねして、髪あげ、寄りて針さしつ。わが身いらずともありぬべかりけることのさまかな、などかくしおきたることにかとおぼゆ。御前の、いとうつくしげにしたてられて、御母屋のうちにゐさせたまひたりけるを、見まゐらするも、胸つぶれてぞおぼゆる。

帳上げを執り行っても、彼女は役目を務めた晴れがましさでなく、儀式自体のあっけなさについて感慨を述べるのみである。

また、ここで作中初めて鳥羽天皇の描写が記される。鳥羽帝は当時わずか五歳であった。公式の場での一瞬の接触であり、長子はその「いとうつくしげにしたてられ」た姿を目にはするのだが「おほかた目も見えず、はぢがましさのみよに心憂くおぼゆれば、はかばかしく見えさせたまはず」として、天皇をしっかりと見ることはできず早々に退出したと書いている。

鳥羽天皇の描写は、即位後初めて作者が鳥羽天皇の下へ出仕した次の記事のほうが詳細である。

つとめて、起きて見れば、雪、いみじく降りたり。今もうち散る。御前を見れば、べちにちがひたることなき心地して、おはしますらん有様、ことごとに思ひなされてゐたるほどに、「降れ、降れ、こ雪」と、いはけなき御けはひにておほせらるる、聞こゆる。こはたそ、たが子にかと思ふほどに、まことにさぞかし。思ふに、あさましう、これを主とうち頼みまゐらせてさぶらはんずるかと、たのもしげなきぞ、あはれなる。

昼ははしたなき心地して、暮れてぞのぼる。「今宵よきに、もの参らせそめよ」といひに来たれば。御前の大殿油くらかに

しなして、「こち」とあればすべり出でて参らする、昔にたがはず。御台のいと黒らかなる、御器なくて土器にてあるぞ、見ならはぬ心地する。走りおはしまして、顔のもとにさし寄りて、「たれぞ、こは」とおほせらるれば、人々、「堀河院の御乳母子ぞかし」と申せば、まことおぼしたり。ことのほかに、見まゐらせしほどよりは、おとなしくならせたまひにけると見ゆ。

即位式では、まるで人形のような印象だった天皇が、ここで一気に人間味を帯びる。ただこのとき作者にとって鳥羽天皇は、天皇というより一人の子供としか映らなかったようで、年相応の幼い天皇の姿に、亡き堀河天皇と比べて感じる頼りなさを吐露している。

この対面以後、鳥羽天皇の描写は随所に見られる。その多くは鳥羽天皇の子供らしい様子が述べられるのであるが、次のような場面もある。

かなしくて袖を顔に押しあつるを、あやしげに御覧ずれば、心得させまゐらせじとて、さりげなくもてなしつつ、「あくびをせられて、かく目に涙の浮きたる」と申せば、「みな知りてさぶらふ」とおほせらるるに、あはれにもかたじけなくもおぼえさせたまへば、「いかに知らせたまへるぞ」と申せば、「ほもじのりもじのこと、思ひ出でたるなめり」とおほせらるるは、堀河院の御こととよく心得させたまへると思ふも、うつくしうて、あはれもさめぬる心地してぞ笑まるる。

宮中に残っていた堀河天皇との思い出に涙する作者に対し、鳥羽天皇はこのように大人びた受け答えをしてみせる。

岩佐美代子氏は下巻にみえる一連の鳥羽帝描写について「決して帝として理想化して描かれてはいない(9)」として、次のように述べている。

作者は堀河帝の死を赤裸々に描写したと全く同じ態度で、一幼児としての鳥羽帝の言動とこれに対する作者の感情とを、実に率直に素直に書いている。それはそれ自身としても理想化されない一幼児の行動描写として古典文学中その比を見ない真率写実の筆であり、同時に生々しい悲傷が派動的にゆり返しゆり返ししつつ甘美な追憶へと昇華して行く下巻の構成を支える柱として、勝れた文学的効果をもあげている(10)。

長子が全てをありのまま率直に記した結果が下巻の描写であるのか否か。この点についてはもう少し検討を重ねる必要があるように思われる。鳥羽天皇は確かに帝としては理想化されていないかもしれないが、主君の遺児として美化されている部分も考えねばならない。だが、それをさし引いても、岩佐氏の指摘には傾聴すべき所もあるのではないか。

『長秋記』元永二年（一一一九）八月二十三日条には、鳥羽天皇と長子との関係について言及された記事がみえる。

伊與守云、候内裏故讃岐前司顯綱姫、〈字讃岐前典侍〉、此間称先朝御霊〈堀河院〉、奏□々雑事、已及大事、仍召彼兄和泉前司道経、邪気間暫不可令参内之由、被召仰云々、是上皇御気色

也、向僧正所談此事次被示云、讃岐典侍自去年秋、時々称前霊□之由、吾爲奉守護當今、常在内裏、而此間在中宮御方、是暫之懐妊也者、其後有御懐妊事、又此春比之於御懐妊事、已又申障碍、於今者可皇子降誕之由、参内侍所朝暮所祈請也、其事已所叶、禁中人々可感悦者、其後果然、如此事雖不可信、今有其實、仍奉始自主上信仰間、去比又称云、吾先朝霊也、度々託此人令奏旨有實、依裏此女房所令申也、於此賞者随女房申請可被行也、不然者結怨心可成悪事者、其所望何者、以兄道経可被任近江守、吾又焼亡後居所、後院領内造宅可賜者、此事依有私聞歟、不信仍彌給□云此事無裁許其二位—鳥也、爲悪霊可執殺子孫也者、此由以書状示二位、令披覧上皇云々、主上信此女房、申下常閑談給、若依院宣彼女房退出者、主上定不請歟、就中以件人被仰吾共可饗應、若依中宮御事不可令参彼人者、吾中宮方不可向者、此事極有故、雖度々仰、不出口外、雖然以件女房被仰關白了、又中宮御方此事風聞云々、但於余人莫言々々、…(11)

従来、長子が堀河天皇喪失による悲しみのあまり発狂したと解されてきた記録であるが、この記述から『讃岐典侍日記』作者が再出仕後の鳥羽天皇後宮下でも女官として重用され、彼女自身そのことを自負していたらしいということは読み取ってよいのではないか。

下巻で描かれる堀河天皇亡き後に再出仕してからの日々も作者にとってはそれなりに充足した期間であったと考えたい。

## 六　『讃岐典侍日記』作者の執筆意図

では、作者がこの日記を著し、他人に見せることで得ようとしたもの——この日記の執筆意図とは何であったのか。

作者が堀河天皇亡き後、幼い鳥羽天皇のもとへ再び出仕することをためらっている部分の記述である。

ここで作者は、同じように複数の天皇に出仕した周防内侍の和歌を引き、また「あまたの女房のなかに、など、われしも、二代までかくはあるまじきめを見るべからん」と再出仕に気乗りしない自分をくどいほどに強調する。

また、天仁元年の正月には次のような記事がみえる。

正月になりぬれば、この月ならんからに欠かじと参りて、堀河院に参りたれば、人々、「いかで参りたまへるぞ。内にと聞きまゐらせつるは。この月はよもと思ひまゐらせしに」といひあはれたり。「いかでか参らざらん。つかうまつりはてんと思へば。いみじういそがしかりしだにも参りしを」といへば、「まことにかく欠かず参らせたまふことのありがたさ」などいひあひつつ…

堀河院の月忌みに来た人々に「いかで参りたまへるぞ。内にと聞きまゐらせつるは。この月はよもと思ひまゐらせしに」とか「まことにかく欠かず参らせたまふことのありがたさ」と言われた、と記すのである。

ここからは、鳥羽天皇へ再出仕していることに対する作者の一種の引け目のような感情がみえるように思われる。下巻が鳥羽天皇下での宮中の出来事を記しながらも、間にこうした堀河天皇の月忌みに参じた事実を書きとどめるといった構成からもそれが読みとれる

のではないか。

作者は下巻の最後には一緒にこの日記を見たい人、つまり日記を見せたい人の条件として「わが同じ心にしのびまゐらせん人」「われをあひ思ひたらん人」「方人など」ある人、という三点を挙げる。そして、これらの条件全てに該当する女房へ日記を見せ二人で語り合った、ともある。

また、同じく下巻末尾には、日記を読んだ人の反応として以下のようなやりとりがみられる。

いかでかく書きとどめけん見る人の涙にむせてせきもやらぬに返し

思いやれなぐさむやとて書きおきしことのはさへぞ見ればかなしき

序文にも「書きなどせんにまぎれなどやするとて書きたることなれど姥捨山になぐさめかねられて耐へがたくぞ」と類似の述懐がみられる。

## 七　おわりに

はじめに挙げたように、序文には「心を慰められるかと思い書いたけれど、どうにも悲しみを堪え忍ぶことができない」とある。本稿で検討した本文描写はその具体的な表現として見ることができる。

日記文学において難しいのは、「執筆者」である作者と日記中で表される「主人公」としての作者とを、安易に同一視出来ないという所である。例えば『蜻蛉日記』作者が夫の不実を嘆いてみせるからといって、彼女が兼家から愛されていなかった訳ではない。日記の作者が記すのは、作者自身というよりは作者がこう見せたいと考えた理想の自分なのである。

『讃岐典侍日記』とて、その例外ではない。日記中で長子がことあるごとに堀河天皇を追慕しているからといって、彼女が実生活においてもひたすら堀河のことだけを見つめ続けたとは断じ得ない。

日記文学は、同時代の物語文学や和歌文学に比べ論じにくいジャンルと思われます。作者が失われた時間をいかに文字によって回復するかによる文学であると思います。[12]

この石原氏による日記文学の定義に、『讃岐典侍日記』という作品はぴたりと当てはまる。

『讃岐典侍日記』作者は、鳥羽天皇の下での出仕生活にやりがいを感じながらも一方で、過去を忘れ現実を受け入れていく自分自身を後ろめたく思う気持ちがあった。だからこそ日記中に、実際以上に堀河天皇をひたすら追慕し現実に違和感を覚える、という理想の自分の姿を現出させようとした、この理想の自分の現出が『讃岐典侍日記』執筆の意図に深く関わるのではないか。

**注**

(1)　『讃岐典侍日記』本文引用は、石井文夫校注・訳『新編日本古典文学全集二六』（小学館、一九九四年）に拠る。傍線は私に付す。

(2)　池田亀鑑『宮廷女流日記文学』（至文堂、一九二七年）

(3)　『国史大辞典』（吉川弘文館、一九七九～一九九七年）「藤原顕綱」の項（谷山茂執筆）、伊井春樹「顕綱とその周辺」（『古代中世文学論考』

一九九八年十月）、寺本直彦「堀河院時代における源氏物語の伝流」（『平安文学研究』四七輯、一九七一年十一月）参照。

(4) 古池由美『堀河朝の文学―堀河天皇の動静を中心として―』（新典社、二〇〇二年）参照。

(5) 森本元子「讃岐典侍―死を凝視して―」（『国文学　解釈と鑑賞』一九巻一号、一九五四年一月）、今井源衛「讃岐典侍日記―平安女流日記研究の問題点とその整理―」（『解釈と鑑賞』一九六一年二月）など。また岩佐美代子「『讃岐典侍日記』読解考」（『宮廷女流日記文学読解考　総論・中古編』笠間書院、一九九九年）中の「往古の宮廷においては、尚侍・典侍・掌侍の「侍寝」は明治時代まで、自他ともに認める純然たる「公務」であった」との指摘も参考となる。

(6) 小谷野純一『讃岐典侍日記全評釈』（風間書房、一九八八年）

(7) 石埜敬子「讃岐典侍日記における時間の構造」（『論集中古文学三　日記文学・作品論の試み』笠間書院、一九七九年十月）、宮崎荘平「讃岐典侍日記論―追憶の文学再説―」（『平安時代の作家と作品』、一九九二年一月）参照。

(8) 前掲(7)石埜論文。

(9) 前掲(5)岩佐論文。

(10) (9)に同じ。

(11) 『増補史料大成一六』（臨川書店、一九六五年）＊一部本文を旧字から新字に、また意味の取りにくい箇所は傍書により私に改めた。

(12) 石原昭平「はじめに」（『日記文学新論』勉誠出版、二〇〇四年三月）

## 受贈雑誌（六）

昭和女子大学大学院日本文学紀要　昭和女子大学
女子大国文　京都女子大学国文学会
女性文学論　法政大学大学院日本文学専攻室
叙説　奈良女子大学国語国文学会
資料と研究　山梨県立文学館
人文学報　都立大学人文学部国文学研究室
親和国文　親和女子大学国語国文学会
椙山国文学　椙山女学園大学国文学会
成城国文学　成城大学成城国文学会
成城国文学論集　成城大学大学院文学研究科
清心語文　ノートルダム清心女子大学日本語日本文学会
清泉女子大学大学院人文科学研究論集　清泉女子大学大学院人文科学研究科
全国文学館協議会紀要　全国文学館協議会
専修国文　専修大学文学部国語国文学会
そのだ語文　園田学園国文懇話会
高岡市万葉歴史館紀要　高岡市万葉歴史館
滝川国文　国学院短期大学国文学会
滝川文芸　国学院短期大学国文学会